文芸学における価値認識

――歴史美学的考察――

渡辺仁史

緒言

かつて確固とした理念の属性であった普遍性は現在、固陋な観念として人文学の周辺に追いやられようとしている。しかし普遍性とは単なる消極的な妥当性を意味するわけではない。普遍性を求めるとは歴史的には多くがそれに共感し、信頼を寄せ、共有されるべき良きものの追究であったはずである。追究にはその時代の動向に左右されない意義が厳然とあり、その意義を求め続ける姿勢こそが価値あるものとされた。時間性の導入にのみ甘んじることなく歴史美学はそうした普遍性の追究の意義を忘却してはならない。

文芸史は比較の条件である共通性を確保しつつ比較によって差異の認識と作品の選択を通して記述されるが、文芸の歴史美学的価値認識はそうした文芸史においてのみ論じうる。作品の価値認識は具体的作品相互の歴史社会的差異性においてしか論じられないのである。[1] 価値とは単体で存立しうるものではなく、価値への多面的志向として把握されるべきであり、それを認識する存在者と対象となる作品との間で具象化される文芸事象によって生起する関係概念として規定される。そうした関係概念はどのように規定しうるのかを指標を提示しつつ考察したい。

一

読書主体にとっての絶対的価値が仮にあり、動かしがたいとしても、主体自体は歴史社会的心身として固有であると同時に、比較されうるという意味で相対化されてもいることを失念してはならない。文芸史を構成する個々の要素として文芸事象は表現する存在者の存立要件の場に言語分節化されている構造への外的要因との関係性である。一般的には具体的作品についての解釈の論証の末尾に結論的な価値認識が示されることが多い。「みごとな」という非分析的で感嘆詞のような評価はその典型である。美的価値認識にとって演繹的な理念は指標となりがたく、むしろ経験値の秩序化によるものが考えやすい。そこでは倫理の問題と美が連続していることが多い。情愛もしくは恋愛、自然美といった美、優美、崇高等が全体の調和に与する必要はないし、醜、苦悩、不条理等もまたその対極をなすものとして含め座標軸を設定しなければならない。

作品から美的語詞を抽出し、それを美意識として帰納的な意味構造を分析する美学も作品を様式に還元してしまう方法であり採用できない。[2] 作品の具体相が消失してしまう以前の次元で抽象化を止めない限りそれは文芸の価値認識とは言えなくなってしまう。岡崎義恵は「文芸学の目的は、普遍妥当的な文芸的価値の設計という点にある」[3]とするが、自明であるかのような普遍妥当性とは誰にとってのものなのかは必ずしも明確ではない。尚古思想一つをとっても価値観は変化している。多様性が喧伝される中で歴史的事実としての価値規範の変化しなかった問いの場を求めることは困難である。文芸的価値とは単体で超歴史的に存立しうるのではなく、文芸事象と相即する作者・作品・読者の三者間の歴史社会的関係概念である。一方、詩人の等級付けについては古典中国で鍾嶸『詩品』が夙に試みているが、系譜論による補強を勘案するにしても認識主体の好悪による恣意性は覆うべくもない。

作品についての個々人の見解は急速に画一化しつつあるが、それでもなお多様である。しかし、読者は何らかの価値認識を抱くにも関わらず、それらが私的、もしくは相対的なものに過ぎないとして実名による公表をはばかる。一方で作品が依拠した事実等には強くこだわる傾向も見られる。主体の好尚の表明について一見慎み深いと同時に、それが根拠の曖昧なまま個人の強い思い込みとして無批判に作品解釈に持ち込まれているのをほぼ従来の価値認識論は黙認してしまっている。それは既存の価値認識の惰性的な容認、個人の思いつき、誹謗中傷の跳梁を許すだけである。価値認識が根拠を必ずしも必要としないという見解はそれが単なる作品への恣

意的な反応、もしくは自己享受として個人の資格で絶対化されているからである。検証なしの容認は公表しない限り個人の自由として詰まるところ不可知論に陥りかねないし、当然のことながら学とも呼びがたい。

個人の価値認識は容易に変更しがたい体験による先入見に依拠し続けている。体験の記憶の中で単純化・縮約された、あるいは何らかの事情で屈折した先入見との落差が作品の価値認識を生成・変容させるとすれば、それは文芸事象にとっても不可欠な要件である。先入見自体が存在し、歴史社会的に形成された認識であることは当然として、そうであればこそ先入見の前提としての偏在性を焦点化するところから価値認識論批判はなされなければならない。

ある作品がよいか否かは、言語分節的に意味付与された作品によって生起する文芸事象として作品を構成する言（Rede）[4]の歴史社会的文脈の中で決定される。ここでは自己の生への規範性、代補性、固有性、有用性、並びに修辞性の多方向的志向性の相関における読書主体との同一化、もしくは刷新という認識可能性の拡がりへの共有の有無に広義の美的価値認識の指標を設定したい[5]。ここでの指標自体の設定基準は自己と他者の生の存立と倫理的責任にある。偏在性による他存在の排除と価値の共有可能性は表裏一体としてある。問いかけとしての価値認識は共有可能性と認識基準の選定をめぐる緊張関係を導き出す。

二

規範性、代補性は存在者の日常性を保全・維持しつつ、社会性と緊密に関連しながら可能性を探究する様態であり、固有性はそれに抗しつつ日常性を超えて歴史社会的存在者の領域で屹立しようとする様態である。規範性は公的表明によって言語化され明示されうる。それゆえ時に匿名となる公衆と文芸史記述者とでは社会的責任と倫理の切迫性において質を異にする。匿名性は社会を動かすことはできるが、それに責任を持ちえない。原拠が明示されない場合も同様である。その依って立つ基盤が絶えず検証に付されることに耐えうるのかはその妥当性の重要な基準である。

付言しなければならないが規範性はいつも肯定的な指標とは限らない。規範には必然的に逸脱と対立の概念が接続する。主体の位置が規範性の意味を規定する。美に対する醜といった負の要素もまた規範の対極にあって規範性を変化させてゆく動因である。規範性が固定されれば他の要因との関連次第では桎梏ともなる。それゆえ普遍的価値規範というのも近代的・短期限定的な観念であろう。

現実的でありつつ非実現的次元にある代補性は読書主体にとっての精神的支柱、あるいは実現とは切り離された別な生の可能性を具体的に提示し、実際の体験なしに存在者が有限性を超出する可能性を有する。固有性は特徴的な修辞性と結合しやすく、固有性は他者の羨望自体を自己もまた羨望することによって増幅される。それは価値認識が社会的相関から差異の非対称性として生存要件の軽重を伴って発生することを示唆する。ただし、差異の強調とは裏腹に情報伝達・拡散がもたらす複雑性の縮減による画一化に現実は向かっていると考える。機能性によって駆逐されつつある多様性は固有性の前提であるが、情報の拡散の加速の中でただちに消費されてしまうことも多い。

生存にとっての有用性の問いに関しては、先入見としての生の存立要件の問いの場から、ことさら他の要素を保持し続けられない生の窮状において文芸の意義とは何かという問いが出来する。生命維持の意味で有用性の指標は快・不快という感性を包摂する。高揚と陶酔の危険性を退けてもなお、広義の美的対象は存在者にとって何の役に立つのかという歴史美学を苛立たせる問いがしばしば発せられる。

自明とされる価値については支配する側・優位な側からの価値規範の強制も多くあるが、有用性・機能性・生産性への問いはそれを低級・無効として棄却してはならない。それは歴史社会的心身の存立要件、主体の偏在性からの認識拡張性を経験的に言によって問うているのであり、生の存立要件が有用性もしくはそれに対置される使命によって保証されなければ存在者自身が存続できず、作品の意義も疑問視されかねない。かつて議論されたように芸術のための芸術は生の存立基盤が脆弱であり、一方で生活のための芸術も反映論、作品の無個性に陥りやすい。

生存要件の軽視としてのいわゆる頽廃は生の別な可能性、自己の存在意義の確認のためあえて厳然たる規範性への懐疑として歴史社会的充足、もしくは極度の欠乏のもとで現れやすい。爛熟はそのものの否定の条件を形成することによって構築期の追求の志向とは別な、細部にこだわり、あるいは原拠に立ち戻り、細部から全体を再認識する潮流となる。規範性は惰性として桎梏となるゆえに規範性からの脱出、否定、もしくは細部からの見直しを要求される。規範性との齟齬、距離意識がそこにははたらいている。ただし生からの有意な逸脱は例外的に危機または恩寵として与えられる外はない。存在を保持し、社会形成に参与するという点で有用性は言を

通して存在を分節化する認識基準となる。

修辞性についてはそれを極力排除したものから修辞性にほぼ依拠しているものまで連続している。有用性の観点から修辞性が決定的要素であるかは疑問であるが、有用性が体験にのみ根拠づけられるというわけではない。有用性を充足させ、なお有用性に回収されない有用性を超える剰余を絶えず追究することにこそ文芸が存立することも多い。修辞性もそこに緊密につながるであろう。修辞性に内包される言の因果的継起性としての物語性、言の多次元的接合としての比喩、言語場とそれに依拠する想起の可能性の言語認識上の意義は否定できない。

三

以上のような価値指標から死と聖性は独立している。それをどのように位置づけるかは固有の死を一般化・平均化した死への存在という認識に還元してしまうか否かによって異なる。死への存在が価値合理的行為であることを否定し得ない一方で、生命維持の観点からは価値転倒であるという認識も当然ありうる。想像力の結実としての文芸の代補性はそこではほとんど機能しない。思索・葛藤・懊悩もなく文字通りの実践が希求されるのみというのも文芸の考察の範囲を超えてしまう。

聖性から距離を置く存在者の場合、言と言の時間性とを除外しては歴史社会的存在者たりえない。同時に言と沈黙、言語の通時態と共時態との分離不可能性も言の時間性を前提としての認識である。[6] 言による意識の束縛と意識への言の付着、未分節には回帰し得ない心身の固有性ゆえに、客体に相即する多様な言、存在者の自在な自己分節化は十全にはなし得ない。それゆえ文芸の傾向性・固有性も存在者の言に制限されたあり方で出来することになる。

聖性とも一部重なるが、誕生という生の付与による可能性の現出・増大・実現化の一方にある文芸の制約の最たるものである作者・読者の老病死の意識は、生の限界での活動としての物理性と感性の変容とのせめぎ合いの中から生い育ってゆく問いにつながる。文芸が生を問う以上、その問いの場としての生の基本要件はすでに内包されている。逆に生の基本要件を研究の内側でも顧慮しない、文芸それ自体を目的化する自明性・文芸の自律性に寄りかかった学は現実の危機に対処し得ない。生存に対する脅威に言語認識がどこまで耐えうるのかが試され、問いとして歴史美学の研究主体に差し向けられる。その際、自明性に覆われた生存要件の固有の焦点化されたあり方、差異の非対称性の価値認識こそが文芸の言語分節化されるべき対象である。

ただし、価値規範を意識し、軽薄を排して重厚さをめざすあまり作品から簡潔さ、軽やかさ、自在さ、しなやかさ、安らぎ、喜び、希望等をいたずらに除外することは許されない。それらもまた存在者の存立要件だからである。もちろん実存の過度の重視は日常性の意義をないがしろにし、存在者を疲弊させかねない。そうした意味では日常性と非日常性の意義は相補的である。

説明の中で隠れている自明な前提を漸次明るみに出し、それらを問いの場に照らして偏向または欠落として、あるいは伸張・増大として認識するかを問うことで、それ以前の研究にはなかった、もしくは隠されていた諸価値基準によって基礎づけることが可能となる。時には時代に制約された負の価値基準もあるはずである。

多数派にとって規範性は同時にその帰属者にとってのみ有用性となり少数派を排除していることも少なくない。また、両義的な理念として「英雄」のように観念的な総体の象徴として、または抵抗の中心として歴史社会的・偏在的な有用性、価値の宣揚が行われることもあり、注意を要する。消極的・積極的・否定的という相違はあるにせよ、集団の成員が何らかの意味で必ず当該の事態に関与していることを失念することはできない。

一方、自己と他者とを前提とした差異の非対称性によって生じる少数者・社会的弱者からの平等性をめぐる価値規範の刷新の問いは既存の固定的価値認識、不平等の連鎖・増大に繰り返し抗する倫理的原動力となる。想像性を極限まで追究した文芸においてさえもそれが人間（あるいは人間的存在）の描く言による問いであろうとする限り、非対称的にではあるが美的価値認識は分節化されうるし、そこから文芸の美的価値認識の前提となる由来も漸次解明されてゆくはずである。文芸的価値とは、由来の時・場とともに創作者・解釈者が消極的差異に基づく言において生起する事象を言によって再分節・焦点化し、認識する過程で顕在化する意味の明るみであろう。

結語

歴史美学的価値認識は文芸史において歴史的相対性の中に置かれるが、一方で固有性の見地からは受容主体にとって作品は絶対的価値を持ちうる。対象化する作品は読書行為の中でその絶対的価値認識の前提条件が徐々に言によって前景化される。

その時代なりの有用性を基底とする価値規範があり、それは作品の享受に即して公衆の価値規範として作品の消費・需要の継承・影響によって社会的に形成される。

価値認識の受容可能性は歴史社会的に変動する。形骸化する場合もある一方で、進取の気性に富み、完成ではなく拡張・増大を志向する場合もある。ただし、その場合も歴史社会的心身の制約を無視するのは過去の浪漫主義の趨勢に照らして明らかに危険である。それらの有効性や規範性に直接に関与する、その基準をもとに固有性が追求され、固有性は憧憬の対象として存在者の生の代補としての歴史社会的心身の別な可能性を現前させる。作品の存在意義、あるいは価値の認識は、意識の表層での等級付けではなく、生の存立要件に淵源する一様ではない具体的な言及によってのみ表現可能となるはずである。

注

（1）片山良展「文芸作品の評価について」片山良展・三木正之・八木浩編著『文学の基礎理論』ミネルヴァ書房　昭和４９・５　作品内在解釈的観点からの価値評価には歴史性の導入が不可欠であることを片山は検証している。作品に内在する価値基準は自明なのではなく、問いと問いの場によって絶えず変更を迫られる多面的なものである。なお、当然作品構造が規定する基準の方向性についてもそれが正しく認識されないまま受容の循環に入り、正当な認識に至りつくまでに長い時間を要することもあるし、評価の盛衰もまたしばしばある。佐々木健一「価値」『美学辞典』東京大学出版会　平成７・３　は「価値とは必然的に他の価値との比較に立つ概念だからである。確かに、現代において芸術の価値は、問われる必要のない自明性と見なされている。しかし、この自明性の歴史はせいぜい二、三百年のものであり、しかも文化は常に変動してゆくものである。」と芸術的価値の歴史性を指摘している。

（2）岡崎義恵『日本文芸学』岩波書店　昭和１０・１２　参照。

（3）岡崎義恵『文芸学概論』勁草書房　昭和２６・４　３８ページ

（4）F・ド・ソシュールの parole に先行するG・フォン・デア・ガーベレンツの用語。E・コセリウ『一般言語学入門』第２版　下宮忠雄訳　三修社　平成１５・１０　同「ゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツと共時言語学」諏訪功訳　『コセリウ言語学選集（第４巻）ことばと人間』三修社　昭和５８・８　の指摘による。

（5）（1）論文での片山良展の紹介によるとW・ミュラー-ザイデルは「学問の本質のひとつは「人間的な意義」である」として次のような「問題圏」を提示する。すなわち「公開性（das Öffentliche）、次元の高さ（das Höhere）、まとまり（das Ganze）、真実性（das Wahre）、人間らしさ（das Menschliche）」を指標として設定し、言語芸術作品の「自律性」を「歴史」の中で問い直そうとしている。この五つの「問題圏」は「調和」で済ませる認識よりも前進している。ただし、「人間らしさ」という指標のように具象的判断基準を欠いているものもあり、論考の時代性もあるのであろうが「歴史性」の中で評価する主体の規定が文芸の定義に照らして狭隘である。

（6）例えば『梵漢和対照・現代語訳　維摩経』植木雅俊訳　岩波書店　平成２３・８、サンスクリット版全訳『維摩経』現代語訳　植木雅俊訳・解説　角川ソフィア文庫　令和元・７　「入不二法門品」の、言による説明の時間性と説明への言及により派生する諸説示の並立、多面性に対置される、時間性の捨象による全一的沈黙（非分節）の現前と、時間性を有する言への再度の回帰がそれである。

（二〇二一年九月二十九日受理）